

執着強めの双子に愛されて

く 四六時中セックス漬けの甘とろ性活く

藍沢 凜

## 目次

- 一、はじめての夜は甘く蕩けるように奪われて  
.....003
- 二、歪な三角関係の始まり .....045
- 三、ふたりから愛されるということ .....069
- 四、手加減のない愛に翻弄されて .....112

※無断転載・複製複写・転用・ウェブへの掲載を禁じます。

一、はじめての夜は甘く蕩けるように奪われて

私たちは物心ついたときから、ずっと一緒だった。双子の海斗と大地と、そして私。何をするのも三人でいるのが当たり前だった。孤児院で育った私たちは身寄りがなくて、助け合うように生きて来た。まるで私も本当の兄弟みたいに。

だから、十八歳になって孤児院を出るときに三人で一緒に暮らそうとなったのも当然の流れだった。郊外にある小さな一軒家を借りて始めた三人暮らしはささやかだけど幸せ溢れている。

「もうっ、大地ってばつまみ食いし過ぎ」

「だって腹減っちゃって我慢できなくてさー」

「作ってくれる料理、何でも美味しいから待てなくなっちゃうんだよな。でも料理の邪魔しないようにしろよ」

「はいはい。これで終わりにしとくって」

そう言って、大地は反省する素振りも見せずケラケラと笑う。

家のことは当番制で役割を決めている。私が料理当番の時は必ずと言っていいほど大地がつまみ食いをしてくる。

弟みたいな大地がイタズラをして、お兄ちゃんみたいな海斗がフォローをする。双子なのに性格はまるで正反対。もうずっと見ている光景だ。たまにケンカをすることもあるけど、毎日がすごく楽しい。

いつまでもこんな日が続けばいいと思っていた。

どこで間違えてしまったのだろうか。

本当の家族のように過ごしていたあの頃には、もう決して戻れない。

満月の夜だった。何故だか今夜は寝付けずに何度も寝返りをうつ。

小さい頃は、ひとりで眠るのが寂しいと泣くと海斗と大地と一緒に寝てく  
れていたことを思い出す。ふいに懐かしくなつてベッドを出る。時刻は深夜  
の十二時を過ぎた頃、もう寝ているかもしれないけれど海斗の部屋へと向か  
う。

私たちが住んでいる家は広くはないけれど、三人それぞれが自分の部屋がある。一階にリビングやキッチン、お風呂などの水回りがあつて、二階にみんなの部屋がある。階段上がつてすぐに私の部屋、その隣が海斗の部屋。そして廊下を挟んで大地の部屋がある。

海斗の部屋へと向かったのは、単純に隣だからというのものもあるけれど、何かあるとすぐに頼ってしまうのだ。小さい頃からずっと。お兄ちゃん気質だから甘えやすいのかもしれない。部屋の前について、扉を軽く二回ノックする。

「海斗？ 起きてる？」

「起きてるよ。どうしたの？」

すぐに返事がきたことに安心して扉を開ける。

「なんか……眠れなくて」

「そっか。おいで」

海斗はベッドヘッドにもたれてスマホを弄っていた。そろそろ寝ようとしていただろうに嫌な顔ひとつせず私を迎え入れてくれた。私もベッドに乗り上がり、海斗の隣に座る。背の高い海斗は座っていても私より少し目線が高い。目が合うと柔らかく微笑んで、その大人っぽい表情に何故か心臓がドキリと音を立てる。ずっと一緒にいたから気付かなかったけど、いつの間にかこんなにカッコよくなったのだろう。

今さら幼馴染にドキドキしていることが恥ずかしくて慌てて視線を逸らす。それから誤魔化すようにして適当に取り繕った話題を口にする。今日あったことや、今日見たテレビの話、どれもとりとめのない内容だけど、海斗は相槌を打ちながら聞いてくれる。

ドキドキもするけど、海斗の隣ってやっぱり安心する。自分の部屋にひとりでいたときの漠然とした不安がみるみる消えていく。

色々な話をしているうちに結構な時間が経ってしまったようで、時計を見ると私が部屋に来てから既に一時間が過ぎていた。そろそろ戻らないといけない。少し寂しく感じていたとき、海斗の手が伸びてきて私の髪を優しく撫でる。

「元気になった？」

「……え？」

「部屋に入ってきたとき、少し元気なさそうに見えたから」

「そうだった？ 心配かけてごめんね」

「ううん、いいんだよ」

海斗って本当にお兄ちゃんみたい。私よりずっとしつかりしていて同い年ということ忘れてしまいそう。

「頼ってもらえて嬉しいよ。これからも、何があっても俺がついてるから」  
「……ッ」

突然、海斗の表情が変わる。真剣なまなざしで見つめられて、また心臓がうるさいくらいにドキドキし始める。

「言おうかどうか、ずっと迷っていたんだ。でも、もう自分の気持ちを誤魔化すことはできない」

「……海斗？」

「好きだよ」

「え……」

一瞬、言葉の意味が理解できずに固まってしまふ。

海斗が、私を好き？

それは幼馴染や家族に向ける親愛の意味ではないとすぐにわかった。痛いほどの真っ直ぐな視線が私を射抜く。海斗が首を傾けて、顔が近づく。影が重なり、唇に柔らかいものがふれる。

「ずっと好きだったんだ」

「あっ……」

キスされたのだと気付いた時にはベッドの上で押し倒されていた。

「か、海斗。待って」

「俺のこと嫌い？」

「……嫌いなわけではない」

「じゃあ好き？」

「好き、だけど……」

海斗のことは好きだ。でも、それは家族みたいな感情で恋愛として好きかどうかなんて考えたことはなかった。

「恋人としては見れない？」

心の中を見られたようで言葉に詰まる。だめなのに、海斗の真っ直ぐな瞳に見つめられると流されてしまいそうになる。

「好きだよ……。お願い、俺を受け入れて」

「ンッ」

何か言わなければと、口を開く前に唇を塞がれる。さっきみたいにふれるだけの優しいキスとは違って、すごく強引。海斗を止めないと。そう思っていたら、ぬるりと舌が侵入してくる。

「ん、ふ……。んっ……。んっ……。♡」

口の中を舐められて、舌を吸われる。何コレ……。上顎をくすぐられるのが気持ちいいなんて知らなかった。舌と舌を擦り合わせていると、ぞわぞわとくすぐったいような不思議な感覚に腰のあたりが重くなる。

生まれてはじめてのキスに翻弄されていたら、海斗の手がパジャマ代わりのTシャツの裾から侵入してくる。

「や、そこ、くすぐりたいよ……ッ」

「ずっと、こうしたかった。もう我慢できない」

「……あッ」

海斗は止まってくれそうにない。私を更に抱き寄せて、もう片方の手で脇腹をさする。

「ん、ふ……う♡ふあっ♡」

キスをしながら素肌を撫でられて体が火照ってくる。どうしよう。もう既に“何か”が始まっている。止めなきゃいけないのに、されるがままになっ  
てしまう。海斗の手のひらが私のお臍のあたりを撫でて、そのまま下へ滑り  
降りてくる。そして、ショートパンツの中へと入り、下着の上から私の中心  
にふれる。

「やっ……！♡」

「ここ、もう濡れてる。感じやすいんだ。可愛いね」

「んっ、んむ……」

何か言い訳をしようと口を開くと、またキスで塞がれてしまう。口の中を  
熱い舌でかき混ぜられながら、下着の中に手を差し込まれて、直にふれられ  
る。自分でもさわったことのないような場所をまさぐられてパニックにな  
る。割れ目を撫でられるたびにピチャピチャと恥ずかしい音がする。

「あ、や……やあッ♡」

「気持ちいい？」

「やだ♡わかんない、ひあッ!?!♡」

海斗の意地悪な指先がクリトリスに触れる。自分でもさわったことのないソコ。先っぽをくるくると撫でてから押し潰すように刺激してくる。確実に性感を高める手つきに腰が震える。他人から強制的に引き上げられる快感。あまりにも性急で暴力的な快楽に目眩がする。

私は今まで誰とも付き合ったことがなく、こういった経験はまるでない。こんなときにどうすればいいのかがわからない。自分の意思とは関係なく勝手に体が動く。

気持ちがいい……イキたい。イキたい……!!

制御できない快樂で埋め尽くされて、頭の中はそれだけでいっぱいになってしまう。

彼の手の動きに合わせて腰を振る。何かに掴まっていないと自分がどうにかなってしまいそうで、海斗の首にしがみついて、助けを求めるようにキスを深くする。キスなんて、海斗とするまで誰ともしたことなかったのに、彼の動きを真似て舌を動かす。じゅつと舌を吸われて、それと同時にクリトリスを弄る手も激しさを増す。

「んっ♡んっ♡んっ、んん……！」

もう少しでイケそうだと思った瞬間に、突然海斗は動きを止めてしまう。「か、かいと……ッ」

絶頂の寸前で放り出されてしまい戸惑う。海斗を見上げると、ギラギラとした瞳で私を見つめている。

「すごくエッチな顔してる。もっと気持ちよくなろうね」

「あっ……！」

海斗が私のショートパンツに手をかけて、下着と一緒にずり下ろす。あつという間に脱がされて、下半身をさらけ出してしまふ。エッチなおつゆで濡れたおまんこを見られちゃう。あまりの羞恥心に耐え切れずに固く目を瞑り顔を背けると、くすりと笑う気配がする。

「……ふあっ！」

「はじめてだからね。しっかりほぐさないと」

「んっ……！ ん、ん、うあ……ッ♡」

海斗の長い指がソコに埋め込まれていく。

「ん、ん……♡ふ、うあッ♡」

うそ、うそ……指が入っちゃってる♡

「痛くない？ すぐくキュウキュウしてる」

「待って、あっ♡ そんな動かさないで、んあ……っ♡♡」

ヌチヌチと音を立てながら指が出入りする。違和感がすごいけれど痛くはない。ナカの粘膜を擦られているうちに妙な感覚がお腹のなかを支配し始める。

「あん、あっ……ううっ♡」

「よさそうだね」

「う、あっ……ンンッ♡♡」

違和感が薄れてきたタイミングで指を増やされて、妙な感覚は更に強くなる。

ニユポニユポニユポ、ニユポニユポニユポニユポ……♡

「あっ、ひっ……！♡」

グニツとある一点を押された途端、今までとは比べ物にならないほど鋭い感覚が私を襲う。

「や、そこ……だめ……っ♡♡」

「ふふ、いいところ見つけた♡」

「あっ♡ あっ♡ ああっ♡♡」

じゅぽじゅぽと下品な音と共にナカをかき混ぜられる。執拗に弱いところを責められて、何度も瞼の裏に閃光が走る。

ぐぬっ♡ ぐぬっ♡ ぐぬっ♡ ぐぬっ♡

じゅぽっ、じゅぷうっ♡ じゅぽじゅぽじゅぽっ♡♡

「やだっ！ ひうっ、んんーッ！♡♡」

強すぎる快樂が怖くてじたばたと暴れてしまう。けれど力の差は歴然で海斗はびくともしない。

両手はまとめて彼の片手に拘束されて、頭の上でシートに縫い付けられる。抵抗もできずに、私は快樂から逃れようとしてカクカクと腰を振る。

「ね、やっ、海斗お……ッ♡」

早くこの快樂責めから解放されたくて涙声で懇願する。

「だーめ。俺の挿れるんだから、もつとほぐさないと……わかる？」

「ひっ……！♡」

海斗が腰を押し付けて、私の太ももに熱いモノを擦り付けられる。ルームパンツ越しでもわかる。ひどく硬くて、存在を主張している。

「今から俺たち、セックスするんだよ……」

「……ッ！」

低い男の声に背筋が粟立つ。私を捕食しようとする肉食獣のような獰猛な欲。いつもの優しい海斗はいない。こんな激しい感情を隠していたなんて信じられない。

私の願いは聞き入れてもらえず、指を三本、四本と増やされてナカを拡げられていく。私のソコは愛液を溢れさせてまるで粗相しているみたいにビシヨビシヨだ。

「ああ、う……ッ♡ はあっ♡」

ようやく長い指が引き抜かれると、ぽっかりと空いたおまんこが物足りなさを感じて訴える。

「ゆっくり、挿れるからね」

「……んあ♡」

海斗が自身のルームパンツをズリおろすと、ぶるんと勢いよくおちんちんが現れる。初めて見るそれに恐怖を覚える。

あんな大きいのが、私のナカに……？♡

海斗が私の太ももを掴んで開脚させ、おちんちんが私の中心に宛がわれる。

「んうッ！♡♡」

ゆっくりと、でも強引に入ってくる。あんなに弄り回されて拵げられたのに、彼のモノはその比ではない。ミチミチと聞き苦しい音を立てながら侵入してくる。だけどエラの張った先端が入ってしまえば、あとはスムーズに飲み込んでいく。

「うあっ♡あっ♡あっ……！♡」

「ナカあったかくて、俺の溶けちゃいそう」

「んううッ♡♡」

どうしよう。海斗とセックスしちゃった。

太もを抱えられ、ゆさゆさと揺すぶられる。そのたびにカリがなかの弱いところを抉って、全身を快感が貫く。

もう何も考えられない。与えられる快樂のままに、みっともなく喘ぐ。

「かわいい……もっと声聞かせて」

「やだ、恥ずかし……あッ、あううっ♡♡」

海斗は一度動きを止めると私の脚を抱え直す。そして繋がったまま、ぐ、と腰を上げて私の体を二つ折りにする。

「ごめん……手加減できそうにない」

「ンンンッ!♡♡」

ズンッ♡ズンッ♡ズンッ♡ズンッ♡

「あっ♡あん♡♡ああっ……!」

雄の欲望を隠そうともせず、ギラついた瞳が私を見つめる。お腹のなか  
が疼いて彼のモノを締めつける。

ナカの違和感などとうに消えていて、気持ちいいだけで支配されている。  
激しい律動に揺すぶられながら、海斗に必死にしがみつく。

ずぼずぼずぼずぼ！ グチュグチュグチュグチュ♡

「あひっ♡んぐ、う、あっ♡ンンッ♡♡」

「イキそう？ イッていいよ」

「ふあっ、ああっ！♡♡」

硬いおちんちんで奥まで責められる。ゴシゴシ擦られるたびに、いやらし  
い声で喘いでしまう。

太く逞しいもので荒らされるのが、こんなにも気持ちいいなんて……っ♡  
わたし、はじめてなのにセックスで気持ちよくなっちゃう♡♡

「も、だめっ♡イクッ♡イツちゃ……!」

ぐぼぐぼぐぼ♡ヌチュヌチュ、ヌチュヌチュ♡  
ズッ、ズッ、ズッ、ズッ……ズンッ!♡♡

「ン~~~~ッ!♡♡」

奥まで貫かれた瞬間に衝撃で絶頂を迎える。ナカがきゆううッ♡と締まって痙攣している。

「ン、俺も……ッ」

ズチュズチュ、ズチュズチュズチュッ!

「あっ! ああん!♡♡」

「く、うあ……!」

ズポズポズポズポズポズポズポズポツ……!♡  
ドピュッ♡ドピュ~~~~ッ!♡♡♡

「んあ……あ、あん……♡」

長い射精を終えて私のなかから抜け出て行く。萎えても太く質量のある彼  
のものは、それだけでも刺激になってしまふ。

はふはふと喘ぎながら空気を取り込む。全速力で走ったあとのように息が  
苦しい。

ふいに視線を上げると、蕩けそうな瞳とかち合う。

「気持ち良かったね♡」

「……ん♡」

海斗の顔が近づいてきて、反射的に目を閉じると唇が重なる。

「ん、ふう……ん、んっ♡」

「可愛い♡好き、すきだよ……」

「……わ、わたしも♡」

キスが深くなつて、それ以上は何も言えなかった。

海斗とのセックス、全然嫌じゃなかった。何をされても、どこをさわられても気持ちよくて夢中になっていた。きつと、ひとつになるってこういうこと。体がジンと熱くなつて、頭の芯まで痺れてる。私、海斗のこと好きだったんだ……。

自分でも気付いていなかった本心に驚くけど、今はすごく幸せな気分。

キスをして見つめ合つて、またキスをする。私たちは肌を重ね合わせたまま、しばらくそうしていた。